

野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅳ

村越 信子

(平成 16 年 9 月 30 日受理)

Images of Popular Belief in the Open Field Wayside gods and Goddesses Ⅳ

MURAKOSHI, Nobuko

(Received on September 30, 2004)

キーワード：ビルトシュトック、カルヴェール、カルヴァリオ、コプリヤストゥルピス、路傍の十字架像

Key words: Bildstock, Carlvaire, Calvario, Kopliastulpis, Wayside cross

1. はじめに

今日我々の生活に密着した“道”は、人間そのものと同じくらい古い歴史をもっている。

既に古代ローマ時代にバルト海沿岸は琥珀を産することでも知られており、これをローマに運ぶための“琥珀の道”といわれるものが作られていた。北方の琥珀や毛皮を扱う商人と、エトルリアの装飾品・生活用品との最初の交易の為に作られた道である。ほぼ紀元前1900年から紀元前300年頃までの間、中部ヨーロッパには、これらの商人たちが通った4本の商業路が存在していた。

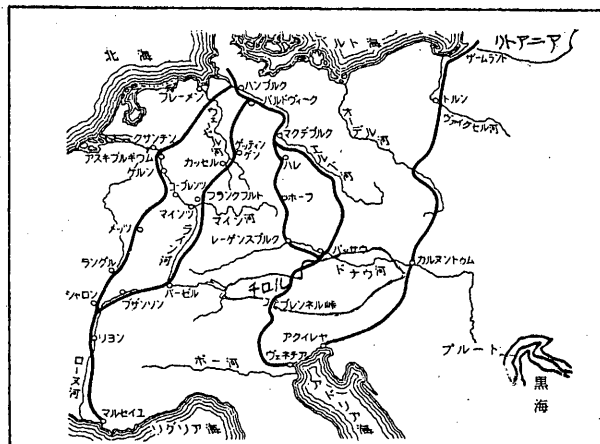
第1の道は、ハンブルグ地域からヴェゼル河とライン河を越え、ライン河に達し、それからライン河を遡ってパーゼルへ、ラインの屈曲部から西に折れてローヌ河に達し、これを下って最後に地中海に面したマルセイユ辺りへと

繋がるルートがある。

第2の中央の道は、まっすぐ南北の方向をとるもので、リューベック湾からマクデブルク、ハレ、レーゲンスブルク、ハルシュタットを経てブレンナー峠に達した。

第3の道は、今なお琥珀の採れるザームライトから東プロイセンの海岸へ出て、トルン付近でヴァイクセル河を渡り、オーデル河の上流から河を遡りメーレンの隘路を通してドナウ河にぶつかる。エトルリア時代にはウィーンから西に向ってカルヌトゥム付近に達し、そこから更にハンガリーを通してアクイレイア（アドリア海北岸）に至ったのである。

バルト海と黒海を結ぶ第4の琥珀の道は、特にヴァイクセル河、サン河を経て、セレット、プルート、ドニエプル河など東方の大河を利用していた。〔地図1〕



〔地図1〕 先史時代の琥珀の道路図
「道の文化史」より転写

東京家政大学研究紀要第44集「野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅴ」でとりあげたオーストリアのチロル地方は、かつてこの第2の中央を通る琥珀の道が貫いていた地域と重なる。この北チロル地方（東京家政大学研究紀第44集235頁）（1）ミーミンガー台地（2）レヒタール付近である。

近年フェルン峠（北チロルにある1,290mの峠）の地域、イムストとロイテの間で軌道の溝のついた石の道路が発見された。前ローマ時代のこの軌道の溝は14cmの深さまで掘れていて、軌間が1mある。この道は勾配が急でカーブがきついため、今なお、俗に“鋭い角”と呼ばれている。古い道にある溝は、車の轍で削られてきただけでなく、荷車を安全に通すために鑿であらかじめ作られたものと考えられる。更にこの先で大がかりに沼の改修工事をしているとき、芝土の約1m下に、はんの木の丸太を敷いた道が見つかったことは、これはすでに前ローマ時代に、アルプスを越える立派な道が出来ていたという証拠である。〔道の文化史〕P97行目～20行目

ヨーロッパにおけるビルトシュトック（独語）の実地踏査は、海路や陸路を利用して人々が広く移動することで文化的にも密接に結びつけられていた地域に焦点を当ててきた。

「野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅴ」のチロル地方から現在も琥珀を産するバルト海の方へ“琥珀の道”を進

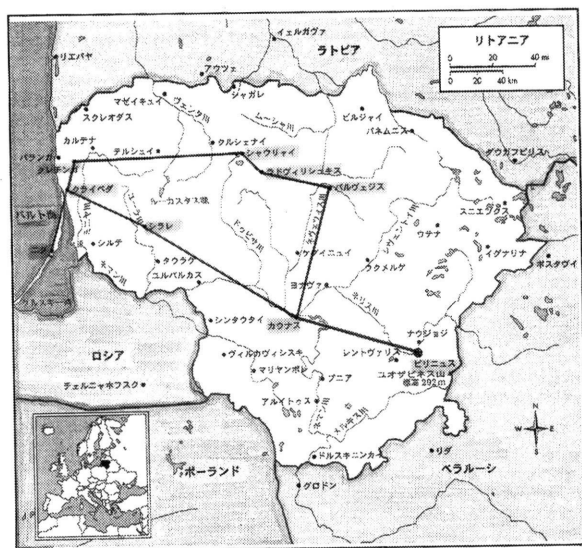
み、路傍の神々を求めべく、今回の実地踏査の目的地を北方のリトアニア共和国へ目を向けたのである。

バルト海に面しているラトビア共和国、エストニア共和国、リトアニア共和国を『バルト三国』と総称してしまいがちだが、その中でもリトアニア共和国を選んだのは、まず現在も琥珀の産地であること、陸路や海路によって開かれて現在に至っている国であること、ロシアや東欧特にポーランドと接点があり、影響を多分に受けることである。そして一番の決め手は国民の80%以上がローマカトリックのキリスト教徒である点である。国の成り立ちについても他の二国とは大きな違いがある。（詳細は3.リトアニアの地勢と歴史に記す。）路傍の神々コプリャストゥルピス（リトアニア語）が隣接している国々から、どのような影響を受けながら成り立っていったのか、時代背景と共に関連の糸口を見つきたい。

リトアニア大使館での情報収集、地図上での調査さらに現地のリトアニア文化遺産研究所の研究員からの情報などにより実踏のコースを研究し、実施の運びとなった。

2. 路傍のコプリャストゥルピス

首都ヴィリニウスをスタートし、カウナス・パルヴェジス・シャウレイへと進み、そしてクライペダからカウナスと大きく円を描くように移動し、ヴィリニウスへ戻るコースである。〔地図2〕



〔地図2〕リトアニア共和国

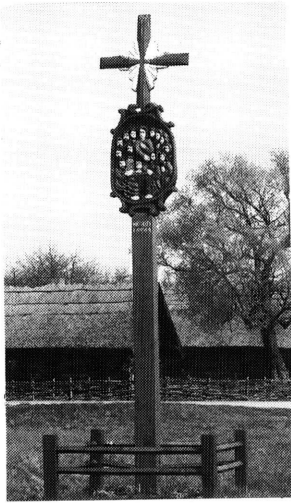
リトアニア文化遺産研究所の研究員からの歴史的遺産（コブリャストゥルピス設置場所）リスト〔資料1〕に基づき、NO.1～NO.7についてコースに加えた。

バルト三国は、ソ連時代の農業政策によって、伝統的な農村は破壊され残っていないため、各国とも博物館がその保存に力を入れている。なお（1）リトアニア民俗生活博物館も、最初の調査対象の地域として重要と考えられるので一地区としてとりあげた。

（1）リトアニア民俗生活博物館（Lietuvos Liaudies Buities Muziejus）（写真1～6）

この国の概要をつかむのに最適と考え、広大な敷地を有する野外博物館を最初の調査対象とした。

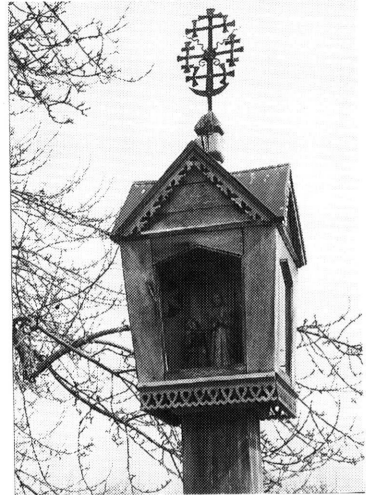
首都ヴィリニウス（Vilnius）から自動車専用道ルートA1を西へ約70Kmのカウナス海（湖水）の畔のルムシシュケス（Rumsiskes）村にある。18世紀から20世紀初頭にかけての木造建築が150棟ほど集められ、のどか



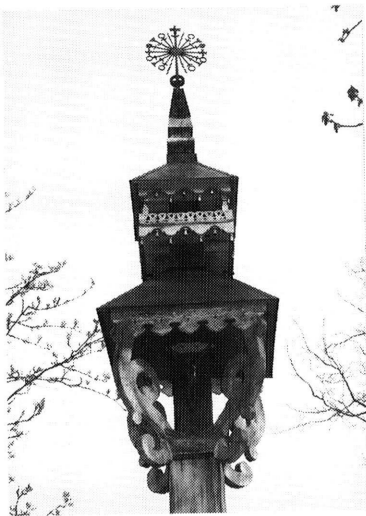
〔写真1〕



〔写真2〕



〔写真3〕



〔写真4〕



〔写真5〕



〔写真6〕

なりトアニアの田舎の風景が再現されている。ひなびた民家の魅力もさることながら、ここで興味深いのは独特の民間芸術の“コプリャストゥルピス”である。

構内は5つのエリアに別れ、小さな集落を形成している。入口から右手の集落を目指し坂道を進むと、集落の入口の白樺林の中に高さ4mほどの十字架にV字の添木のあるものが建っている。さらに進むと灯籠型の頭部に見事な細工が施されたもの。教会のある草原の分岐に、最近塗り直され鮮やかな色彩で『最後の晩餐』の場面が青空にくっきりと映えている。〔写真1〕次から次へと現れ、目を奪われるばかりである。またどの集落の木造の民家もよく手入れがされている。

東の外れの集落の灯籠型のコプリャストゥルピスは、石造りではないが頭部がガス灯を彷彿とさせ、四方に聖人やマリア像などが設置されている。〔写真2〕集落の中央広場を再現した地区には、かつての商店が軒を列ね、その中は琥珀製品や木工製品の製作工房になっていて、“頬杖をついたキリスト像”（後述）やミニチュアのコプリャストゥルピスなどの製作販売もされていた。

次は西の外れの集落へ進むと、庭の一角にサクラ属の白い花が満開で、その花の下に巣箱型の精巧な細工のもの、〔写真3〕木製の素朴な祠型など素晴らしいものであった。

各集落の入口、中央広場、出口、庭の一角などに、素朴であるが精巧な細工の多種多様なコプリャストゥルピスが設置されていた。〔写真4・5・6〕

十字架型にも美しい装飾が施されていた。そこには純粹なキリスト教の厳格さは感じられず、どこかのんびりとした親しみのあるその姿は、信州の畦道で出会った道祖神に通じるものであろうか。

（2）カウナス周辺〔写真7-8〕

リトアニア第二の都市カウナス（Kaunas）の北側に点在している村々を〔資料1〕に基づき踏査を行う。

ルートA1から未舗装の一般道に入り、砂塵を舞い上げながら、141号線沿いのラウドンヴァリス（Raudonvaris）〔資料1-1〕村に辿り着く。この村の教会が調査対象であったが、生憎扉が固く閉ざされていて、内部のキリストの彫像は見学できなかった。だが教会の庭に立つ3基の十字架型のコプリャストゥルピスに出会うことができた。〔写真7〕その中の1基は、仏像の光背を思い出させる装飾が施されていた。

次の目的地を目指しカウナス郊外を東に進み222号線へと向う。道路標識が少なく迷ったが、やっとヴァンジョーガラ（Vanzhogala）〔資料1-2〕の集落に到着。資料によると橋の袂の祠型を探索しても川らしいものがない。なんと川幅4-50cmの小川で、2mほどの橋があり、その袂に柵に囲まれた白亜の高さ3mほどもある祠型の聖人を祀ったコプリャストゥルピスに直面することができた。〔写真8〕

〔資料1〕

1. RAUDONDVARIS . . . Church. The Pensive Christ by sculptor Matas Mencinskas, created in 1939-1940
2. VANDZIOGALA . . . The shrine-type pole with sculpture of St. John Nepomucen. Erected near the bridge across the river.
3. PABERZE . . . Wooden church with small scale folk architecture outside. The Pensive Christ sculpture on the wall of church (outside).
4. IBUTONIAI . . . The cross of famous Lithuanian folk sculptor (1835-1916), created in 1890.
5. BAISOGARA . . . The small scale architecture object (chapel-tower) by the way erected in 18 century.
6. KLEBONISKIAI . . . The ethnographic village museum with small scale folk architecture.
7. SIAULISI . . . Muzeum of folk art. Collection of folk sculpture.



〔写真7〕



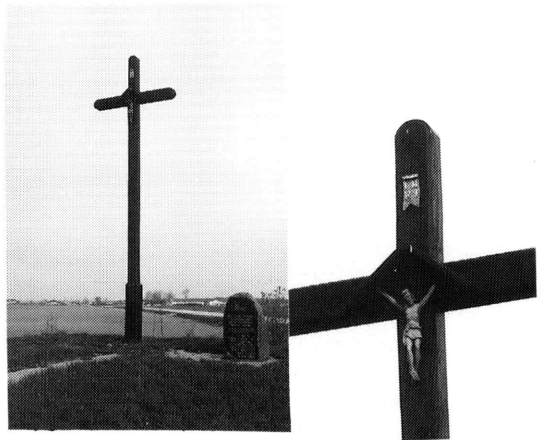
〔写真8〕

〔3〕パネヴェジース周辺〔写真9-17〕

ラトヴィア共和国との国境まで80Kmほどの北部リトアニア地区とも云うべき地域である。パネヴェジース(Paneevezys)はカウナスの北100Kmほどのところである。パネヴェジースから195号線を南下して、約8Km地点の交叉点に高さ5mほどの十字架型、〔写真9〕さらに5Km先に十字架部分がクローバーのような形の柱部分に装飾の施されたもの、〔写真10〕195号線から別れて入った集落には王様のような貫禄のある聖人像がどっかりと鎮座〔写真11〕して今までの分類にはあてはまらないものなど各種のものに出会った。〔写真12・13〕

やっと目的のイブトニャイ(Ibutoniai)〔資料1-4〕の集落にやって来た。木製の巣箱型とでも云うべき精巧な細工が施されたコプリャストゥルピスが、たった1基農道の脇に立っていた。〔写真14〕彩色されたキリスト像や周囲の装飾も長年の風雪に曝され色褪せて、折角の著名な造形作家による作品も哀れであった。さらに西へ4Kmほどでバベルジェ(Paberze)〔資料1-3〕の木造教会が現れた。立派なレンガの門に鍛造のフェンスで囲まれた構内には各種のコプリャストゥルピスが点在している。教会内は鍵が掛かっていて見学は出来なかった。巨大な(6-7m)木彫の施されたものから、先端の小部屋にはガラスが入っていてガス灯を思わせるものなど、〔写真15〕どれも見事な造りである。教会の外壁の“頬杖をつくキリスト像”(祠型)〔写真16〕などと取材対象が盛り沢山である。

次は144号線方面へと砂埃を舞い上げ農道を西方へ直走る。ポチュウネリアイ(Pociuneliai)の集落で北へ転じ、辻の大型のコプリャストゥルピスを取材し、〔写真17〕144号線へと進む。周辺の畑は、春の種蒔きが盛んに行われていた。144号線を横断してパサキヤイ(Pasakiai)の集落に入る。この集落のものも見事な彫刻が施されていた。次に144号線沿いのバイソガラ(Baisogala)〔資料1-5〕の集落に到着。だが調査対象物が明確でないので集落を一回りして探したが特別なものはない。教会は丁度日曜りと祝日(母の日)のミサのため大勢の村人が押し掛け、とても見学できる状態でない。残念だが先へと車を進め144号線からルートA9へ転じシャウレイ(Siauliai)へと向う。



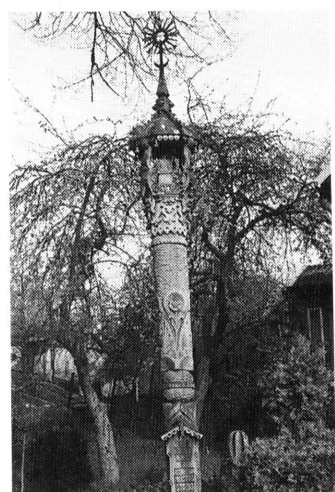
〔写真9〕



〔写真10〕



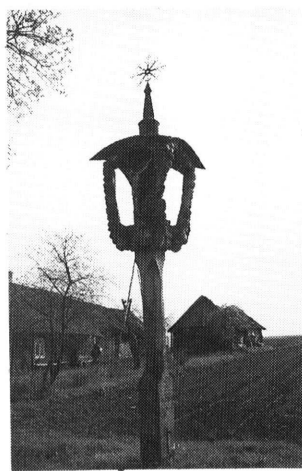
〔写真11〕



〔写真12〕



〔写真13〕



〔写真14〕



〔写真15〕



〔写真16〕



〔写真17〕

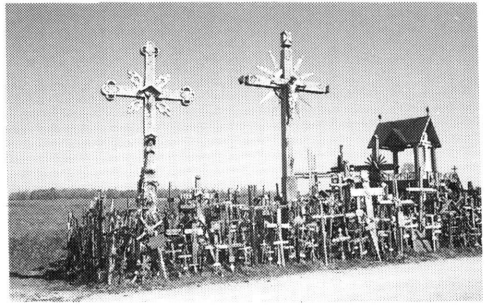
(4) 十字架の丘〔写真18-19〕

〔資料1-7〕の博物館と彫刻コレクションは生憎休館であった。シャウレイの町から北東へ約10Kmのところにある。ルートA12を北東に進み、2基のコプリャストゥルピスが立つ分岐を右手に入る。こんな寂しい道の奥に有名な“十字架の丘”があるとはとても考えられない。対向車との擦れ違いも困難な道である。2Kmほど進むと産業廃棄物の山のような雑然としたものが現れた。

リトアニアはしばしば“十字架の国”とよばれたりする。この地を訪ればそれも納得できる。大小無数の十字架がひしめき合って立っていて、何とも壮絶と云う言葉に値する様である。高さ5m以上の見事な木彫の十字架から、それらの十字架に鈴なりに架けられた無数のロザリオまで、その数はリトアニアの人口より多いのではないだろうか。〔写真18・19〕

どのようにして、ここに十字架が立てられるようになったか、今では誰も覚えていないらしい。村人からの古い記憶によれば、最初の十字架は1831年のロシアに対する蜂起の後、処刑や流刑にされた人々のために立てたらしい。丘にまつわる伝説は、十字架の数ほどあるようだ。“十字架の丘”は、抑圧された民族、宗教の象徴として長い間大切に扱われてきた。ソ連時代この丘は、立ち入り禁止区域とされKGBと軍はブルドーザーで何度も十字架をなぎ倒し、焼き払った。しかしそのつど人々は、夜陰に紛れて新たな十字架を立て直した。

近年は、シベリア流刑などの犠牲者を偲んで十字架建立が盛んになっている。“十字架の丘”は、訪れるもの



〔写真19〕

全ての思いを吸収して現在も膨らみ続けている。この国の各地で出会った、十字架型の全てのタイプがこの丘に存在するようである。

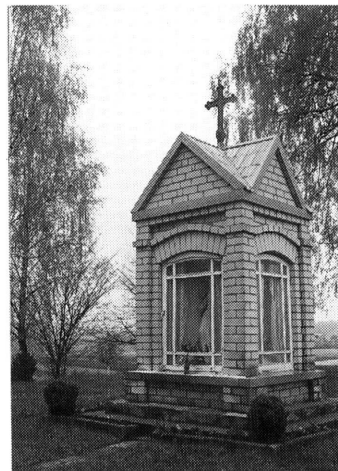
(5) シラレ周辺〔写真20～22〕

バルト海に面したクライペダ (Klaipeda) から首都ヴィリニウスへと東西に国を横断するメインルートA1。この道をクライペダから80Kmほど東に進んだ辺りにシラレの町がある。この村を取材することになったのは偶然の出会いであった。

A1のシラレ付近のパーキングエリアから自動車専用道をカウナス方向に暫く走って測道へ出て、162号線を南下する。バルシャイ (Balsiai) の集落の入口、小高い林の中に立派な小屋のような祠型のコプリャストゥルピスを発見。〔写真20〕この国では初めてのタイプのもの

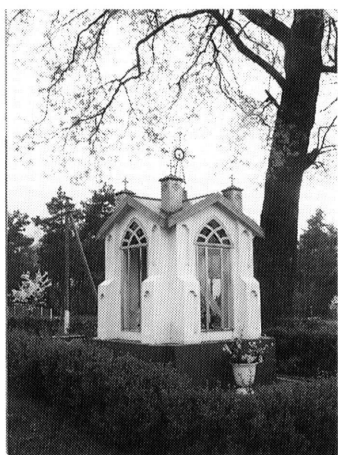


〔写真18〕



〔写真20〕

であり、四方にガラス窓があり、その中には立派なキリスト像、マリア像、聖人像などが鎮座している。このタイプは新しいもののようである。さらに2 Kmほど先にも白亜の館風の祠型。〔写真21〕さらにシラレの町の公園にも、立派な花壇で飾られた大きな三角屋根の祠型〔写真22〕のこれら3基は、他の国々でも見かけない巨大で見事な造りの祠型であった。



〔写真21〕



〔写真22〕

3. リトアニア共和国の地勢と歴史

広大なロシア平原の西端の22%ほどの部分が特に東欧平原と呼ばれ、リトアニア共和国とともにラトヴィア、エストニア、ウクライナ、ベラルーシ、ポーランドがこの地域に属している。北はバルト海、南は黒海の影響に

よって気候は比較的穏やかである。

東欧平原は、湿度、温度、日照量、植生、動物相、地質、景観などにより、北よりタイガ圏、森林圏、森林ステップ圏、ステップ圏に区別するが、リトアニアは森林圏に入る。国土の26%が森林であり、湿地と湖沼が多く、ほぼ平坦な国である。

森林圏は多くの場合、針葉樹林で落葉が少ないため土中の腐食成分は少なく、地味はあまり良いとは云えない。樹木としては、針葉樹の他カシ、ボダイジュ、カエデ、西洋トネリコ、シラカバ、ハクヨウなどが多い。

今回の実地踏査コースで見かけた木造の民家や建物、そして路傍のコプリャストゥルピスはほとんど木製であり、木材の利用度が高いことが伺われる。

木製のコプリャストゥルピスには、精密な彫刻が施されているので彫刻に適した材質でもあるようだ。今回の実踏では森林や樹木について調査は出来なかったが、高度な木の文化が存在することを実感する。

リトアニア共和国は、紀元前20年頃バルト族の祖先が現在の地に移住して来たときから始まる。13世紀頃リトアニアの大公ミニダウガスによりカトリックに改宗し、最初の王位についたが、暗殺され再び自然崇拜の国にもどった。14世紀後半以降400年間、ポーランドと同君連合国家の関係にあったため、ポーランドの制度が残り、またローマカトリックの土地であったため、リトアニアはカトリックを受け入れたのである。

18世紀後半(1795年)第三次ポーランド分割の結果、リトアニアはロシア領になり、ポーランドと共同国家は消滅した。ロシアの統治が始まると農民の生活は劣悪化した。ロシア正教を奉じるロシアとは相容れず、多くのカトリック教会が没収され、ロシア正教に改修されたり、ポーランド語、リトアニア語の使用も禁止された。

しかし、これらの禁止令はロシア化を促進するどころか、かえってリトアニア人の民族精神を目覚めさせた。

1880年代にはスヴァルキア地方(リトアニア西南部)の農民たちの中から新しい世代の知識人が輩出し、民族再生の指導者として育っていった。

リトアニアがロシア領になる前、リトアニアの上層階級は、ポーランド文化を身につけ、ポーランド語を日常語とし、リトアニア人としての民族性を失っていた。リトアニア語を話し、古来の民族文化を保持していたのは農民たちであった。農民の話し言葉とみなされてきたリトアニア語は、「国語の父」と称されるヤブロンスキス

の勢力によって民族のアイデンティティとして復活し、その後も再生運動の原動力となり、リトアニアの文化が確立されていった。

第一次世界大戦が始まり、リトアニアはロシアとドイツの戦場と化した(1915)、リトアニア人は独立の機会をうかがっていた。1991年リトアニアは、51年ぶりに独立を回復したが経済的自立むずかしく、人々は生活苦に陥っていたが、1993年8月ロシア軍最後の駐留部隊がリトアニアから引き揚げたこと、そして9月8日リトアニア人を母とするローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が5日間リトアニアを公式訪問し、人々に慰めと感動を与えたことは二つの大きな出来事であった。

近年リトアニアは、バルト三国の中で政治的に最も安定しており、街並も修復され中世の佇まいを取り戻している。

1994年と2000年に世界遺産に登録された2ヶ所の他にも、多くの文化遺産が残されている。そして今年(2004年)5月正式なEU加盟国となり、高い経済成長を遂げつつある。

4. 路傍の神々(まとめ)

限られた日程と少ない情報を最大限に生かすため、リトアニア共和国を首都ヴィリニウスから環状に移動し、[地図2] 資料や情報のある地域については、詳細に実地踏査を行った。

(1) 十字架型(仮称)

ほとんどのものが木製で十字の交差する中心に極小の磔刑像が取り付けられ、十字架の柱部分はキリストの大きさに対して太く大きくしっかりしたもので、高さもある。柱部分には精巧な木彫が施されたものが多く、仏像の光背のような装飾もあって、その木彫の技術の高さには驚かされるものがあった。キリストの表情は何処かあどけなく、のんびりしたもので、残酷さや苦悩の姿は見受けられなかった。

(2) 灯籠型(仮称)

このタイプは石製であり、初期のタイプのビルトシュトック(独語)と考えられるものであるが、今回リトアニアで出会ったものは全て木製で精巧な木彫が施されていた。柱の上部の小屋状のものの四面にガラスが嵌め込まれマリア像や聖人像が祀られている。小屋状の部分や柱にも見事なデザインの木彫が施され、彩色が残ってい

るものも見受けられた。明治時代のガス灯を彷彿とさせる型のものもある。ガラス入りのものに限り特に“ガス灯タイプ”と仮称することにした。

(3) 祠型(仮称)

このタイプはオーストリアに沢山見受けられた型である。内部に祀られているものは、キリスト像、聖人像、マリア像、ピエタ像である。だが、座像のキリスト像は他国で出会ったものとは全く違い、キリストが頬杖をついているのである。表情は柔和で、この国の磔刑像と同様のんびりとした親しみ易いものである。

リトアニアの書籍「古の木彫」に掲載されている祠型のコプリャストゥルピスの古い時代(1800年代)のものは、道端と云うよりは、見晴しの良い畑の中や農道の脇などに設置されていた。多くのコプリャストゥルピスの足下には柵がある。現在のリトアニア共和国では、この祠型はあまり多くはないようである。実踏(5)のシラレ付近で偶然出会ったが、立派な建築物のコプリャストゥルピスは、教会型と分類することも検討したが、内部に礼拝用のベンチが設置されていないので、教会型とはせず祠型としてまとめた。

(4) 巣箱型(仮称)

取材した60基の中で一番多く出会ったのが、この巣箱型のコプリャストゥルピスである。(2)の灯籠型に含めたガス灯タイプとは区別しにくいデザインのものが多いが、他国の巣箱型と比べると大変支柱が高く3-4mはあるのが特徴である。この支柱が高いのは、国全体がほぼ平坦な地形なので、その自然の景色の中に埋没しないためなのだろうと思われる。

大小の巣箱を重ねた、二重タイプの巣箱型には彩色され、見事な木彫が施されているものにも出会った。

(5) その他

どのタイプにも属さない、トーテンポール型や丸太型とでも云うべきものがあった。巨大な柱の頂上には十字架が取り付けられているので、コプリャストゥルピスとしての役割を果たしていると考えられる。

5. 結 び

前回の調査対象であったオーストリア・チロル州から、かつての「琥珀の道」を北上してリトアニア共和国に集

点を当て“路傍の神々”を求め実地踏査を行った、短期間ではあったが、60基という期待通りの素晴らしいコプリヤストゥルピスに出会うことができた。

リトアニア共和国は、80%以上がカトリック教徒というお国柄だが、リトアニアの最初の王がカトリックに改宗するまでは、自然崇拝の国であった。リトアニアのカトリックは自然とのつながりが深く、この国独特の雰囲気がある。

コプリヤストゥルピスは、仮称十字架型、巣箱型、灯籠型、祠型とに、ほとんど分類することができるが、初めての型は、ガス灯タイプ、トートンポールタイプ、壁龕タイプと仮称し記載した。実地踏査の結果、代表的なものはリトアニア民俗生活博物館に集められ野外展示されていて、伝統保存に力を入れていることが伺われる。構内には祠型は少なく、木製の祠型が2基あっただけで、素朴なものであった。今回の一番大きな特徴はキリストの表情と“頬杖をついたキリスト”の存在である。祠型や巣箱型、灯籠型、そして壁龕の中に、柔和な表情の“頬杖をついたキリスト”が鎮座していた。あどけなさ、呑気さ、そして温かさを感じられる像である。磔刑像のキリストの表情にも、苦しみや惨さは感じられなかった。この“頬杖をついたキリスト”は、ドイツのブラウンシュバンク（14世紀）にも見られ、15-16世紀にはこの伝統はヨーロッパのカトリック圏全域に広がったが、18世紀にはヨーロッパから姿を消したようである。

この伝統は17世紀頃フランスの修道士によってリトアニアにもたらされ、自然崇拝や先祖崇拝と習合し、樹上に設置して守られ根づいたようである。リトアニア語でこのキリストをルピントイエリス（Rupintojelis）と呼ばれているが、生憎リトアニアに起源をもつものではなく、またリトアニア独自のものではない。

この“頬杖をついたキリスト”は形式化し、木彫家の作品が置物として沢山店頭に並んでいるほどである。

全般については、どの国のものよりも支柱が高く、真っ平らな土地であるこの国では自然の景色の中で際立っており、その支柱には見事な彫刻が施されていて、まさに野外芸術作品といえる。さらに、磔刑像のキリスト本体が十字架に対してどれも非常に小さなものが多く、印象に残った。

リトアニアの人々は表情が豊かで優しさをもち、親しみを感じる人々であった。しかしひとたび、国や民族の危機となれば、犠牲をも顧みない強い意志がある民族なのだろう。数多くのコプリヤストゥルピスに出会い、そこに祀られたキリストの表情から、そんなことが感じられたのである。これからも民俗のシンボルの一つとして大切に守られていくことだろう。

2004年はEUに加盟した記念の年でもあり、コプリヤストゥルピスの調査を通してリトアニア共和国を少しでも理解することができことは感慨深い。

謝 辞

現地の情報を提供して下さったリトアニアのラドヴィラヴィチュスご夫妻、リトアニアの調査のきっかけを作って下さった石塚真理氏へ感謝申し上げます。

参考文献

- 1) シュライバー「道の文化史」1939 岩波書店
- 2) リトアニア出版「古リトアニアの彫刻」
- 3) 伊東孝之 他・編「世界各国史20」1998 山川出版社

Summary

This time, we moved up “the Amber road” from Tirol to Republic of Lithuania and visited Gods along the street.

Now 80% of the people of Lithuania are Catholic. But Before they became Catholic, they were sect of nature worshippers.

So that they have a deep connection with the nature and the Kopliastulpis has a very special atmosphere in this Country.

We examined their shape, the place for foundation and the characteristic on the basis of the geographical features and the history of Lithuania.